

国語総合 古典 古文分野

— 授業の局面別グループワーク —

国語科 島 山 俊

1. はじめに

2021年11月20日(土)にオンラインで実施された公開授業の報告をする。授業にはいくつかの場面があり、その時々にはふさわしいグループワークが考えられる。例えば、導入部のワーク、展開部のワーク、まとめとしてのワークが考えられる。通常の授業ではそのすべてを一教材で行うことはまずないが、せっかくの機会なので、一つの教材で授業展開に応じてワークを行い、それを編集して公開した。公開時にオンラインで理解していただけるように必要な資料もすべて付したので、今回も資料を見ていただくことで授業の実際を少しでもイメージしていただけることができると考える。

2. 取り組みの実際

2.1. 導入部のワーク

今回の公開授業で取り上げた教材は『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」である。まず、タイトルに注目させる。もっとも『枕草子』の場合、冒頭部分をタイトルとしているので、タイトルを読むことと冒頭部分を読むことはイコールである。まず「五月」の異名を確認し、ついでに一年十二カ月の異名も確認する。一年生であるから生徒から出て来なければ教師が説明することもあるがそれでもよい。学校の実情による。次に現代の暦と陰暦との違いを説明する。私はいつも一ヶ月半ほどずれていると説明している。実感としては一ヶ月のずれでは少々短い感じがしている。さらに「五月雨」という語を提示し、それが今の暦では六月半ば頃のことであり、つまり「五月雨」とは「梅雨」のことであると認識させる。そして「梅雨」時に出かけるとはどのような意味があるかを自由に想像させる。生徒は実にさまざまな想像をして楽しませてくれる。特に否定することはない。それぞれのイメージしたものを肯定して、板書しておく。最後にまとめとして「梅雨」の鬱々とした気分の時に久しぶりに晴れ、陽光に触れる喜びを感じることがあるのではないかと問いかける。このように教材に入る前にどのような場面かを共通認識としておくことは本文の読解にたいへん役に立つ。導入部のワークとしてはそのようなものがふさわしい。

2.2. 展開部のワーク

展開部のワークとしては本文読解に関わるものがイメージしやすい。しかし、今回は文法的な課題でのワークの可能性を探ることにした。今回の教材には助詞の「の」が多用されている。助詞の「の」にはいくつかの用法がある。それを文法書で確認したうえで、教材内にある「の」のすべての用例についてその文法的意味を考えさせた。実は「の」の主格の用法と同格の用法にはどうにも判別できないものが存在するので

ある。文法書にも同格の用法はどう確認するかは載っているが、それを適用しても判別しにくいものがある。今回の「下はえならざりける水の」の「の」などはどちらとも取れる。それを指摘したうえで、では主格と取る時と同格と取る時にはどのような違いが生じるかを考えさせると生徒は的確に説明してくれる。主格と取る時は風景全体に焦点が当たっているように感じるが、同格と取ると「水」が情景のなかでクローズアップされてくる。どちらがふさわしいかは好みの問題もあるだろうが、助詞一つの解釈で文全体の趣が変わってしまうことを体験すると一つ一つの語を大切に考えようとし始める。

2.3. まとめのワーク

近年の、古文を現代文と読み合わせるという風潮を踏まえ、この章段を解説した高田祐彦氏の文章を読ませ、この文章から読み取れる作者の世界の捉え方について考えさせた。高田氏の文内の「人間と自然との新鮮な関わりによる、自然の新たな姿の開示」という部分がこの章段の読み取りに資すると考えたからである。もちろん引き歌表現についての解説であるが、その部分の読解の参考にしたうえで、最後に改めて論文を読ませ、作者の自然の捉え方について考えさせるのである。作者は視覚・触覚・嗅覚を使って自然を捉え、それを表現に生かしている。そのことに気づかせると、今後、自身が自然を多様に捉えることができることになろう。

さらに今回は発展的課題も用意した。「〇〇月ばかりなどに××に歩く」という定型で始まる創作作文である。2020年度に初めて行った際は何も指定せずに行ったところ少なくない生徒が古文で作文した。それを受けて2021年度は古文と指定して創作作文させることにした。古文作文は生徒にはハードルが高いと思われたが、やってみると多くの生徒がそこそここなしていた。既習の語や表現を使うなど、復習に役立つのではないかというのが行ってみて感じたことである。生徒の創作の実際は資料をご覧ください。

3. まとめ

今後、授業の中に生徒の主体的な活動を取り入れることが必要になってくることは古文や漢文であっても間違いのないことであろう。古文・漢文の授業は授業者が解説するスタイルが主流である。しかし、やりようによってはそこにもグループワークを取り入れる余地はある。それぞれの教師が多様な活動を構想する一助となればよいと考え、今回の公開授業とした。創作作文を古文で行うことはハードルが高いと考えるなら現代語で行うことにしてもよい。肝心なことは季節とそれにふさわしい場面を見出すことである。それは「春はあけぼの」の段でもうかがわれるように『枕草子』全体に貫かれているもので、作者、清少納言の自然や社会の捉え方に通じるのである。単なる読解にとどまらず、今後の自然や社会の生徒自身の見方に刺激を与えるような授業のあり方でありたい。また、文法のワークのハードルが高ければ、箇所を指定することで作業量を減らすこともできる。それぞれのワークにやりようがある。そしてそ

のような工夫のもと、多くの方が、多くの学校で生徒主体の授業を実践することになるだろう。様々な新しい試みが行われていると思うが、それらを広く共有し、共通の資産として活用できることを願っている。最後に参加してくださった方々の感想の一部を紹介したい。

- ・今回の教育研究会に参加できて良かったです。古典文法に関しては、教員により本当に伝え方が様々であると思っていたので、非常に参考になりました。古文作文を作成させることで、文法の理解、古典への興味も高まると思いました。私も授業の中で、取り入れていきたいと思いました。
- ・格助詞「の」の用法の識別を考えると作品の解釈につながる授業がとても印象的でした。私自身も文法の学習が文法だけで終わらないようにしたいといつも意識して授業を作るように心がけていますが、大変励まされました。また、ペアワークの先の展開をどのように工夫するかが課題だと思っていたので、ペアから4人組、8人組、クラス全体と段階的に大きくして共有していく方法は大変参考になりました。
- ・国語を拝見しました。授業内容、構成、生徒への問いかけ・反応と大変興味深く、また自身の教材研究の視点においても大きな学びを得ました。国語の時間において生徒に考えさせたり気づかせたりするべき核にあたる内容だと思いました。ぜひ自身の授業でも実施させていただきたいと思いました。
- ・「五月ばかりなどに山里に歩く」の前半は「散策中に見るもので自然に重きが置かれ」後半は「日常生活に自然をからめて」書かれていると、生徒の発言を丁寧に捉え、場面や視点、五感の違いをはっきりさせていくところが素晴らしかったです。生徒の発言が最初は本文を正確に捉えていないとしても、吟味していくうちに修正されていく、これこそ、ことばの授業だと思いました。またペアワークや、作文発表の2名、4名、8名、5名に絞って無記名で作品発表、挙手で1位になった人は名前を公表して、工夫したところを発表してもらうなど、生徒がドキドキニコニコするしかけがありました。対面授業の醍醐味を再確認しました。
- ・本校も『枕草子』を素材に古文作文や現代作文の実践はありますが、畠山先生は公立校の低学力の生徒の教室経験が長いとおっしゃられて、何度も「言い方は難しいですが」「語弊がありますが」と前置きされたペアワークへの考え方や、高校生は語感覚が良くて、様々なポイントで色々なつぶやきをするという生徒観、それを拾ってすりあわせていくのが一つの仕事という捉え方には説得力がありました。助詞の「の」の識別にせよ、「古文らしい」表現にしていく板書にせよ、一つひとつの言葉を吟味して味読の世界を体験してもらう活動は、現代文よりも、文章の短い古文のほうが向いているのかもしれない、それが現代文の、言語活動の單元にも意識的に結びつくといいのかもしれないと、今日気づきました。
- ・「生徒にとってハードルが高ければ、ハードルをうんと下げて、一緒に作り上げていくという意識で」という言葉に励まされました。